

ンヴァスの画面を空と水のものか油絵具で青と緑の単純な二色に塗り分け、その中央に軍艦旗のような子供の絵によくある日の出を描いて見せ、たちまち響聲を買ってしまった。

画学科の生徒たちは前任のフォンタネージとあまりにも違う技術・品性ともに下劣なこの教師を交替させようと学校当局にかけあったが、不首尾に終わったため、連袂退校してしまふ。

小山正太郎、印藤真楯、松岡寿、浅井忠、西敬、高橋源吉らが主なメンバーであり、彼らは神田今川小路に家を借りて十一字会という共同研究所をつくり勉強をつづけることになる。これには本多錦吉郎、松井昇、大河内信缸なども参加した。フォンタネージの弟子たちを中心につくられたこの会が、やがて迎える洋風美術の冬の時代を越えて我が国洋風美術家の最初の団体である明治美術会へと流れる地下水脈を形づくっていくのである。

生徒たちの不評をかったフェレッチも明治十三年一月三十日付で辞任、新たにサン・ジョヴァンニ Acchiele San Giovanni が同年二月十二日付で就任し、画学教室の指導にあたる。人物画の得意であったサン・ジョヴァンニは擦筆画の手法を熱心に教えたこと、彼の時代、明治十四年一月に東京大学医学部から玉越興平が招聘され、画学彫刻に必要な骨論筋論を中心とした解剖学講義が行われたことは特筆されてよい。また彼は明治十四年三月、上野で開かれた第二回内国勸業博覧会に生徒の作品と共に自作を出品、西洋美術の啓蒙にひと役買っている。

しかし、時代は漸く国粹保存、伝統回帰への風潮が高まり、それに押されてか、当局者の方針はにわかに一転、洋風絵画の発展を抑

圧、妨害するまでになる。そんな流れの中で十五年十月に農商務省主催で開かれた第一回内国絵画共進会には、洋風画の出品が一切拒否されるといふ事態に立ち至る。更に十七年の第二回内国絵画共進会でも洋風画が除外されるといふ大勢の中で十五年十二月工部美術学校は閉鎖され、翌十六年一月二十三日をもって廃校となったのであった。『沿革報告』には次のようにある。

明治十六年一月廿三日、美術学校ヲ廢シ、書學生徒十五名ニ修業證書ヲ授與ス。生徒未タ卒業ノ期ニ至ラサルニ由ル該校ハ明治九年十一月ノ創設ニシテ今之ヲ廢スルニ至ル迄滿五年ニ過キス。其初メ入校ヲ許セシ生徒ハ六十名内六名女生徒ニシテ其卒業證書及ヒ修業證書ヲ得タルモノハ、彫刻畫學ニ科併セテ三十五名ニ過キス。然レトモ其圖畫製品ニシテ博覽會場ニ出シ稱賛ヲ得ルモノ尠ナカラス。今之ヲ本校ノ博物館ニ藏ス。

画学教師サン・ジョヴァンニは二月十一日付で解約された。工部省の雇外人も美術学校開校時の九年には二二一名であったが、十六年には三八名に激減している。官公庁全体でも九年の四八四名が十六年には一三二名となっている。欧化主義時代の終わりを告げるものである。

明治初期の美術行政

明治初期に政府がとった美術に関する政策の第一は工部美術学校

設置（明治九年）による西洋美術移植であるが、既述のような伝統美術の衰微に対しても全く無為無策であったわけではなく、明治四年に大学（のちの文部省。当時の大学大丞は佐野常民^{文政五年、明治三十五年}）の献言を容れて古器物保護の太政官布告を発し、同年文部省（文部大丞町田久成^{天保九年、明治三十年}）を設置するや、ここに博物館を置き、古器物の収集、保存、展観の業務に着手させるなどの措置をとっている。

博物館の設置は文化財保護行政の端緒となったものであるが、しかし、当時の規模は貧弱で、しかも、殖産興業路線に組み込まれて行ったため、文化財保護機関としての機能は十分に果たし得なかった。物品の保存に関する措置はかくのごときであり、一方、美術家の保護についてはなんらなす所が無かったといつてよい。

ところが、明治六年以後、政府は一転して美術行政に力を入れ始める。その契機となったのはウィーン万国博覧会への参加であった。それは新政府にとって初めての経験であり、西欧技術導入と貿易拡大の絶好の機会であったから、政府は国をあげて参加することとし、準備には特に念を入れた。そのためワグネル（Gottfried Wagner 1830～1892。大学東校御雇教師、化学担当）に出品顧問を依頼し、その指導のもとに日本の伝統的美術工芸品を中心に出品することとした。欧米先進国が工業力を競い合う万国博覧会で対等に競い得る力が日本に無かったためにこの措置をとったのであるが、それは予想を遙かに越えて大好評を博し、新政府が国際舞台に初名乗りをあげるに相応しい躰となったばかりでなく、美術工芸品の海外需要が激増するきっかけともなった。この成功により、政府は以後特に外

貨獲得の観点から美術工芸の奨励に意を用いるようになったのである。明治七年には政府の援助のもとに起立工商会社（同二十四年に経営難により解散）が発足。同社は多くの工人を雇い入れて大規模な美術工芸品製造を行い、ニューヨークやパリの支店を通じて販売し、大いに外貨獲得の任を果たすとともに、政府が海外博覧会に参加するたびに情報提供等の役目も果たした。社員の中にはのちに本校に關係した者が多く居た。まず、社長の松尾儀助は本校商議委員となり、蒔絵の工人であった小川松民、金井清吉、白山福松は本校漆工科の指導者となり、金属彫刻の工人杉浦清太郎、同滝次郎は本校彫金科の指導者となる。同科の中心的指導者となる加納夏雄も同社の受注製作に携わっていた。

このような奨励策は美術工芸分野の一角に活気をあたえ、伝統を見直す気運をある程度呼び起こした点で効があったが、しかしそれは飽くまでも富国策の一環としてとった策であって文化政策ではなく、したがって美術行政と称するに足るものではなかった。この傾向はのちのちまで尾を引き、やがて岡倉覚三らの運動によって改革が加えられることになる。

内国勸業博覧会の美術

明治七年、内務省が創設され、大久保利通が初代内務卿に就任。富国強兵を目標とする勸業政策を本格的に推進し始めるが、大久保は海外博覧会への参加を西欧先進技術の導入及び輸出拡大の手段として非常に重く見、翌八年のメルボルン万国博覧会の際から参加